

寄席でレビュー、住吉踊り

長谷川 修

うだるような暑さの最中^{さなか}、毎年八月中席の寄席は、どこもお盆興行で充実している筈と、当日の公演予定を検索する。「浅草演芸ホール」昼席は今評判の市馬、白酒、一之輔の出演に加え、大喜利として一度は見たかった「風流住吉踊り」が付いており、急遽浅草へ出かけた。「演芸ホール」には早い時間に入ったが、コロナ禍で市松模様^{しんそうもよう}に制限された座席はほとんど埋まっている。

通常の落語の方は、一人当たりの時間が短く物足りなかったものの、大喜利の「住吉踊り」は予想以上に楽しめた。

「住吉踊り」は、大坂の住吉神社の勧進興行に始まり、江戸の大道芸を経て帮間^{たいごま}の座敷芸となるが、大戦後は先代の助六がただ一人、その芸を継承していた。この間の事情と面白さに気付いた志ん朝は、周りの仲間^{なかま}に声をかけて一緒に踊りの稽古を始め、一九七八年の「演芸ホール」で復活させる。志ん朝はその後も住吉連の座長を勤め、二〇〇一年の夏には入院先の病院を抜け出し参加し、その四十日後に亡くなった。

踊りは、「伊勢音頭」「奴さん」「かっぱれ」等を三人から十人位で交替しながら踊るが、踊りの合間に寸劇やコントが入る。衣装は揃いの浴衣^{ゆかた}に、緋色の襷^{たすき}と赤い股引き^{ももひ}で様子が良い。住吉連には落語だけでなく、漫才、講談、手品等と様々な分野の芸人が集まり、男女比では女性が四十%位と多い。経験は、座長の志ん彌、女性で三味線漫談の橘之助^{きつのみすけ}、当代の助六等の住吉踊り歴三十年を超えるベテラン組から、手の振りが遅れ足許が覚束ない初参加組まで幅広く、レビューとしての整った美しさにはほど遠い。しかし観客だけでなく連中も楽しんでやっているの、これはこれで良いと思う。

全体として一時間近くあったが、テンポが速く、笑っているうちに時間は過ぎた。また、舞台上上がった連中は三十人位であり、通常の落語があわただしかったのも納得できた。

浅草の街は休業の店が多くて活気に乏しく、志ん朝の端正な口跡を思い出しながら帰路についた。